

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

国際開発研究科の言語

研究科長 成田 克史

「ツールとしての外国語」という言い方をよく耳にする。国際開発研究科の研究科長として、これまで何度か英語でスピーチをする機会があったが、私の英語はまさにツールでしかない。ツール、すなわち道具とは、人間の外にあり、人間が操作するものだ。英語でものを言ってみるものの、私にはどうも実感がわかない。どういうイントネーションで言えばよいのか、はなはだ心許なく、確信が持てない。英語は私にとってまだ「言語」になりきっていないようだ。よく言われるように中学から大学の教養課程まで8年も英語を学んだのに、身につけていないのだ。訳読やパターン練習ばかりで、実際に使う場を経験していないのだから無理もない… ということに訳がましいが。

大学で私はドイツ語を学んだ。春夏に1週間ずつ、ドイツ語だけを話すことが許される合宿があり、2年の夏からこれに参加し、初めて外国語を使うということを知った。3年の夏にはドイツ研修にも参加し、ほぼ2カ月、日本人はもちろん、他の外国人もほとんどいない田舎の農家で、農作業を手伝いながら生活をともにする機会を得た。暮しの中でドイツ語を使うことで、私のドイツ語はもはやツールではなく、心の一部、体の一部となっていったような気がする。もちろん母語話者の能力には遠く及ばない。ただ、「あなたのことがとても好き」と言われてグツときたり（彼女は当時まだ7歳、念のため）、「黙ってないで何とか言え」と言われて「いまいましい奴だ」と言い返したり、ドイツ語という言語が、私の中で思考や情動と深く結びつくようになっていったことは確かだ。さて、国際開発研究科の三専攻のうち、国際開発専攻と国際協力専攻は教授言語が英語である。日本語ができなくても、英語で指導を受けて学位を取得することができる。今秋から始まる名古屋大学国際化拠点整備事業（いわゆるG30）の英語による教育を先取りするものであり、本研究科の特徴のひとつとなっている。日本人学生も留学生と机を並べ、英語環境で学生生活を送ることで、英語を外的なツールから体にしみこんだ能力へと高める者も多いことだろう。国際的に活躍できる人材を目指す者にとって大きなメリットである。



一方、国際コミュニケーション専攻の教授言語は日本語である。その理由は、同専攻には英語を得意とする者のほかに、中国語、スペイン語、ロシア語、フランス語、ドイツ語など、さまざまな外国語を得意とする日本人学生が入学してくるからであり、また、さまざまな国からの外国人留学生には単に専門分野の知識を吸収するだけでなく、日本で学ぶことの価値を見出すことが期待されるからである。留学生の日本語能力の高さにはしばしば感心させられる。外国語の学習というよりは、まさに言語を獲得しているという印象を受けることが多い。英語以外の言語を専門とする日本人学生には、日本語と英語以外に、もうひとつ別の世界を知っているという強みがある。

国際開発研究科の守備範囲は、経済開発から異文化理解まで幅広い。それは、異文化理解なしの開発協力はありえず、また、開発協力の場面にコミュニケーションについて解決すべき課題が数多く存在するという事情があるからだろう。国際開発専攻、国際協力専攻、国際コミュニケーション専攻の学生が教授言語の違いを乗り越えて相互乗り入れすることができるようになれば、国際開発研究の視野がさらに広がるのではなかろうか。教授言語を英語と日本語としていることにはそれぞれ一理あり、これを統一することは難しい。カリキュラムの問題もある。しかし、国際開発・協力専攻の学生がコミュニケーションに関する話を聞き、国際コミュニケーション専攻の学生が開発協力の現場の話を聞くことは今でも部分的には可能である。そんな学際的交流がもっと活発になったら面白いと思う。いや、その前に、まず自身の英語を鍛えるのが先だろうか。

研究プロジェクト紹介

国際セミナー「日本語とフランス語:対照言語学的アプローチ」の開催

教授 藤村 逸子

去る、2011年5月14日、15日の2日間、GSID棟第1会議室において、国際セミナー「日本語とフランス語:対照言語学的アプローチ」を開催した。70名もの参加者があり、実りある集まりとなった。開催は、国際コミュニケーション専攻・言語教育と言語情報プログラムが主催し、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「形容詞語彙の使用パターンとその構造化に関する日仏語対照研究」(研究代表者:藤村逸子)が共催した。

国際コミュニケーション専攻は4月と5月の2月間、高等社会科学院(Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales)(フランス)のIrène Tamba先生(一般言語学、日本語学)を外国人研究員として迎えていた。この機を生かして、日本語とフランス語を考える研究会を開こうという意見が内外から寄せられた。急遽参加者、発表者を募り、目の回るような忙しさの中で準備し、開催にこぎつけた。短期間の準備期間であったが、Tamba先生の人気の高さは尋常ではなく、17人もの発表希望者が、ただちに集まった。さらに、この集会には、GSID国内研究員の大會美恵子先生(名古屋大学名誉教授)(日本語教育、日本語学)にもコメンテーターとして参加していただいた。大會先生は、初めから終わりまでの長時間、それぞれの発表に対して、丁寧なコメントや質問をしてくださった。このようにGSID研究員の二人の先生のご協力を得て、国際セミナーは申し分のないものとなった。

研究発表を行ったのは、筑波大学、大阪大学、関西学院大学、青山学院大学の先生と学生、名古屋周辺の大学の先生(愛知県立大学、名古屋外国語大学)と、名古屋大学のスタッフと学生である。広西大学外国語学院(中国)、鮮文大学校(韓国)で教員をしているGSID博士課程の二人の学生も遠くから参加してくれた。発表の条件は、日本語とフランス語、またはそのうちの一方を対象とする研究であって、しかも対照言語学な観点が含まれていることという条件にした。17人の発表者は、土曜の午後2時から日曜の午後5時まで、文字通り休憩時間もなく研究発表を行い、質疑応答をした。これ以外の参加者としては、福岡、筑波、東京、京都、神戸など、各地からたくさんの方々が来られ、和やかな雰囲気の中、活発な意見の交換があり、楽しい時間が流れた。天気にも恵まれ、第1会議室の窓からは遠く

の山々が望まれた。Tamba先生の専門分野は、日本語とフランス語を対象とする意味論と統語論の分野の言語学である。Tamba先生はまた、フランスにおける日本語研究の第一人者である。多数の著書・論文のうち、手に入りやすいものとしては Que sais-je?(クセジュ文庫)の中の一冊の La sémantique(意味論)2005(第5版)がある。Tamba先生は、20年近く言語学の分野の国際的学術雑誌である Faits de Langues(言語現象)の編集にかかわってこられた。この雑誌の特徴は、発行のたびに各号の執筆者が

一同に会し、会議を開いて討論したのちに論文を完成させるというやり方である。そのためTamba先生は大変顔の広い方である。また、学術的な会議のやり方をよくご存知の方であり、今回の集まりにもその経験をご教示くださり、大変役にたった。

セミナーは5月14日の14時に始まった。基調講演はなく、開始の挨拶のあと、全員が平等に35分の持ち時間を与えられて発表した。最初はTamba先生による、フランス語の形容詞と色彩語に関する発表であった。15日17時の閉会の前には、Tamba先生と大會先生による講評が行われた。日本語学がご専門の大會先生からは、フランス語との対照の観点から日本語を見ることによって新鮮な発見があったという講評をいただいた。発表者、出席者からの評価は上々であり、来年も開催してほしいという希望が相次いだ。

研究発表の概要は以下のとおりであった。初日は、Tamba先生の発表のあと、日本語とフランス語の時制に関する発表が3件あった。最初の二つは時間に関するものであり、3つ目は時制の迂言的使用に関するものであった。つづいて構文の意味と形式に関する英仏語対照研究、謝罪に関する日韓語対照研究と、義務や必然性に関する日仏語対照研究があった。

翌15日は9時40分から始まった。午前中は動詞に関連した4件の発表があった。最初の2件はフランス語の直接目的語をめぐる現象がテーマであった。次に、日仏語の動詞語彙、日本語の複合動詞接辞に関わる発表が続いた。午後の最初の2件は日本語の形態素(語より小さな単位)に関わる研究であり、一つは品詞語尾、もう一つはアスペクト接辞の機能に関するものだった。3件目は形態の概念に関わる理論的な発表であった。続く2件は照応と数に関する日仏語対照研究であり、最後は、フランス語の複合名詞の生成と使用における色彩語の機能に関するものであった。

かくして「Tamba先生と大會先生の国際セミナー」は成功裏に終わった。



2010年度 学位授与状況

2010年度に当研究科(GSID)より授与された学位数は以下のとおりです。

課程博士取得者17名。論文博士取得者1名。課程博士取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)3名、国際協力専攻(DICOS)8名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)6名です。

修士学位取得者は55名。取得者を専攻別に見ると、DIDが23名、DICOSが18名、DICOMが14名です。



▲博士学位取得者記念撮影(DID)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOM)

入学状況

2011年度 4月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	39 29 70	13 13 23	11 13 21
国際協力	23 25 48	17 18 31	13 16 26
国際コミュニケーション	21 20 33	12 9 20	12 9 18
合計	83 74 151	42 40 74	36 38 65

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	9 12 17	5 8 12	4 6 10 7
国際協力	2 4 5	2 4 5	2 4 5 2
国際コミュニケーション	7 5 13	4 2 7	3 1 6 2
合計	18 21 35	11 14 24	9 11 21 11

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

2010年度 10月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 3 3	1 3 3	1 3 3
合計	1 3 3	1 3 3	1 3 3

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 2 3	0 2 2	0 2 2 0
国際協力	2 1 2	2 1 2	2 1 2 0
国際コミュニケーション	1 3 3	0 1 1	0 1 1 0
合計	4 6 8	2 4 5	2 4 5 0

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

学位取得者のことば

国際コミュニケーション専攻 修了生 野内 遊

2011年3月に博士号を取得することができました。

私が博士号を取得できたのは、ひとえに私の指導教員を引き受けて下さった二村久則教授、櫻井龍彦教授、サヴェリエフ・イゴリ准教授、そして国際言語文化研究科の水戸博之教授の的確かつ、熱心なご指導の賜物であります。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

私は、現代メキシコ社会の変容と北部国境地域の関係について研究し、博士論文を執筆しました。博士課程入学当初も大まかな博士論文の構想を持っていました。しかしながら、それを、まず私自身の中で、より具体的にそして明確にしていくことができたのは、指導教員を引き受けてくださった先生方のコメントであり、またご指導のお陰であったと思っています。

私は、博士課程に4年間在籍しました。今振り返ってみると、その4年間は、常に指導教員の先生方のコメントに対する答えを自分なりに模索していった作業の連続であったと言うことができます。最終的に提出した博士論文は、博士課程入学当初に考えていたものとは、問題意識や大きなテーマは変わってはいませんが、アプローチの方法や、章立て、そして結論は、当初考えていたものとは異なったものとなりました。今から考えると、かなり曖昧な問題設定でありました。また、アプローチの方法も具体的ではありませんでした。

そのような状態でしたが、徐々に、博士論文の全体像がはっきりしてきました。この研究の前進は、言うまでもなく、私一人では到底できないことでした。また、博士論文を書き上げることもできなかったと思います。指導教員の先生方の熱心なご指導のお陰であったといえます。本当に締め切りの直前まで、ご指導いただきました。このような経験から、冒頭でも述べたように、指導教員を引き受けてくださった先生方には感謝以外の言葉を見つけることはできません。

博士論文を提出することによって、一応の区切りはついたわけですが、まだまだ、自分の中では研究上の課題が多く残っているというのが実感です。それらの課題に対しての答えを見つけるということが現在の目標となっています。少しずつ前に進むという気持ちでここまでできましたし、これからもそのようにしていくつもりです。

私にとって国際開発研究科で過ごした4年間は、非常に恵まれた環境であったと思います。ありがとうございました。



新しい挑戦への卒業式

国際協力専攻 修了生 南 相珉

3月11日の東日本大震災により日本の社会が多少沈滞した雰囲気なかで卒業式は行われました。大震災から僅か2週間後の卒業式であったため、卒業生やその家族にとって一生忘れられないものになったと思います。

私にとってもいろいろな意味を持つ卒業式でした。まず、一つ目の意味としては、博士号の取得という結果から得られた達成感です。GSIDに在籍した6年は、自分の実力不足もありましたが、不安の連続で、とても長い時間を感じました。しかし、最後まで頑張ったことにより取得した学位に対する喜びは、とても大きなものでした。また、二つ目の意味は、GSIDに在籍して自分の視野を広げることができたことです。GSIDには各国から留学してきた学生たちがたくさんいます。その留学生たちを通してさまざまな文化に触れ合うことで、モノ・事に対する視野がさらに広がりました。さらに、卒業式と同時に長期間に渡った留学生活が終わったことです。卒業式は、私の人生のなかで一段落になり、次のステップに進むための新しいスタートを意味します。

私は、日本と韓国の環境教育に関して研究し、博士論文を執筆しました。最近、社会では自然を大切にしながら、いかに持続可能な社会をつくることができるかについて関心が高く

なっています。今回、東日本大震災は、日本だけではなく各国が自然の大切さについて再び考えるきっかけになったと思います。

今、日本は、大災害を乗り越えるという新しく険しい道へ歩きはじめています。学位取得への道の挑戦と日本の復興への道の挑戦、このふたつの挑戦は、目標を達成するための過程において、つながるものがあると思います。

つまり、険しい道への挑戦には、その過程を楽しむことと努力することが大事であり、どんなことでも、苦難と思わず楽しむことができれば、継続できるものです。学位取得を目指すGSIDの学生の皆さんも、学位取得への道を楽しむことで、大きな研究成果をあげることができるのではないかと思います。

最後に、私が博士号を習得して無事に卒業式を迎えられたのは、厳格かつ的確なご指導と温かい励ましを頂いた先生方、いつも支えてくれた家族、そして、応援してくれる友達がいたからだと思います。心から深く感謝を申し上げます。



名古屋大学大学院国際開発研究科創立20周年行事の紹介

実施済みの行事

■「創立20周年記念シンポジウム」の開催

開催日:2011年3月4日 場所:名古屋大学経済学部第二講義室

■『国際開発学入門—開発学の学際的構築』の出版

大坪滋・木村宏恒・伊東早苗編著、勁草書房、(2009年12月25日発行)

国際開発学会から国際開発学会賞の特別賞を受賞

■第3回「開発のためのアジア学術ネットワーク(ANDA)国際セミナー」の開催

開催日:2011年3月5-7日 場所:名古屋大学(シンポジオン会議室など)

実施予定の行事

■国際開発学会を名古屋大学にて開催

開催日:2011年11月26-27日 場所:名古屋大学工学部IB電子情報館

■『言語データの収集と分析(仮題)』の出版

藤村逸子・滝沢直宏編 ひつじ書房(2011年11月発行予定)



TOPICS

国際理解教育プログラム(EIUP)の活動紹介

国際開発専攻博士前期課程2年 近藤 亮佑

国際開発研究科の創設から20年、創設10周年記念事業の一環として本研究科の院生が主体となって立ち上げた国際理解教育プログラム(Education for International Understanding Program; EIUP)は、昨年度で活動を始めてから10年の節目を迎えました。国際開発研究科には様々な文化的背景や経験を持つ院生が所属しており、国際的視点から開発・協力・交流について学んでいます。EIUPは、研究科の特徴を活かし、地域の国際化に貢献するために国際理解教育の出前授業を行っています。この出前授業の目的は、児童・生徒が普段あまり接することのない留学生と実際に交流することを通じ、身近な視点から国際理解を深めてもらう機会を提供することです。具体的には、東海地区の小・中学校等に留学生とEIUPスタッフを派遣し、留学生の国の文化や遊び等を紹介し、異文化理解を促す場を提供しています。

ここで、昨年度および今年度の活動事例を紹介します。

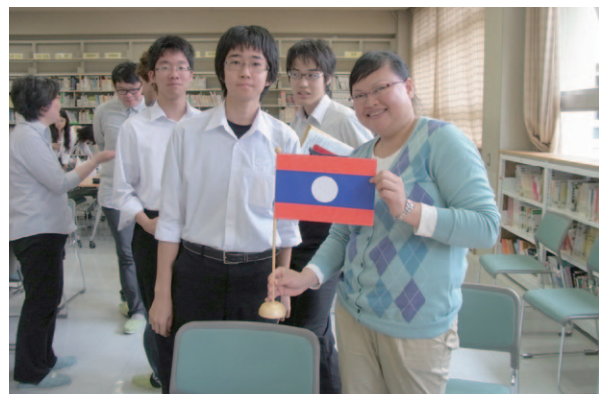
昨年度の11月、石浜西小学校で行われた「多文化共生フェス

タイン 西浜」に参加してきました。EIUPは「留学生と遊ぼう」コーナーを担当し、留学生の国独自のじゃんけんや伝統的な遊びを通して、児童達と交流してきました。最初は、慣れない掛け声や遊び方に戸惑う児童もいましたが、一緒に遊ぶうちにコツをつかむようになり、楽しく遊ぶことができました。また、児童達は「じゃんけんの由来」が国によって様々であることを知り、驚いているようでした。普段の出前授業とは少し違った形の異文化交流でしたが、留学生、EIUPのスタッフ共々、貴重な経験を得ることができました。

今年度初めての出前授業は、名古屋大学教育学部附属中・高等学校で高校2年生約120名を対象とした「地球市民学」の授業に参加してきました。留学生6名の出身国(ラオス、ミャンマー、韓国、中国、ボリビア)の紹介、留学生の視点から見た「日本の文化のここがヘン」というテーマで、生徒との交流をはかりました。また、日本文化を生徒が留学生に説明する時間も設けられ、相互文化理解が促される内容の濃い授業となりました。



▲石浜西小学校「多文化共生フェスタ」にて



▲名大附属高校「地球市民学」の授業にて

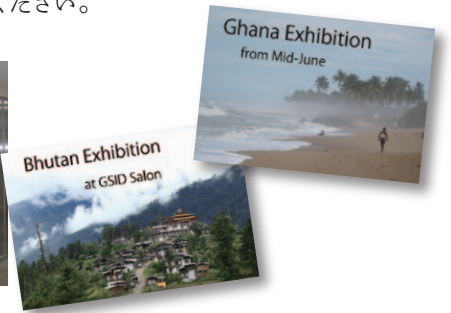
GSIDサロンがオープン! ブータン展・ガーナ展を開催!

教授 大坪 滋

予てより開設準備を進めてきましたGSIDサロン(国際開発研究科棟1階ロビー横)の展示サロン・ギャラリーとしての改装が本年4月末に完了しました。幾つかの現存するローコスト・ギャラリーの調査に基づいて設計したGSIDサロンは、今後、GSID構成員の様々な研究・教育・社会貢献活動や、世界の学术交流協定校の紹介等々、当研究科内の情報共有、研究科外部へ向けての情報発信基地として活用される予定です。

柿落として5月12日より約2ヶ月に渡り、ブータン展・ガーナ展を開催しています。GSIDは昨年、「国民総幸福」の概念を基礎とした国造りで有名なブータン王国の王立ブータン研究所、戦後アフリカ最初の独立国であるガーナ共和国のガーナ大学社会科学院と学术交流協定を締結いたしました。特にガーナ大学はGSIDにとってアフリカ最初の学术交流協定校となりましたが、これらは異文化尊重の原則に則り、独自の開発の道を歩む友を理解し、尊重し、共に歩むべく研究交流を進め、既存の欧米モデルに捕らわれ

ない独自の開発モデルを構築するという当研究科の活動原則に則った活動の一部を体現しています。今回の展示はこれらGSIDの新しい友人を紹介するために開催いたします。展示構成は、協定書、調印式の模様、その国の開発理念を含む国情報、工芸品、写真等です。特に写真については、私が2年に渡り彼の地を歩き回り、彼の地の自然と人々の生活を撮りためたものからギャラリー展示に適したものを選んで展示しております。是非、開場成ったGSIDサロンにお出かけください。



院生活動紹介

IOMインターンシップ経験談

昨年10月から今年の4月までの約半年間、私はバンコクにある国際移住機構(IOM)のアジア太平洋事務所の労働移住ユニットでインターンシップ生として、働かせて頂きました。

私自身、「移民」という立場で様々な国の教育を受けた経験があったため、「移住」と「教育」の関係性をより深く研究したいという強い想いがありました。従って、IOMでのインターンシップは研究を進める上で大変貴重な勉強機会であるとともに、アジア太平洋の移住状況という私にとって全く新しい分野の知識を得ることができるというまたとない機会でした。

半年間の主な業務は、①パキスタンとモルディブの労働移住状況のレポート作成(今年度末発行予定) ②他国連機関との会議・イベントにおいてのノートテキング ③労働移住ユニットの四半期レポート作成 ④リサーチやプレゼンテーション資料作成の4点でした。インターンシップ業務開始当初は、労働移住についての知識は皆無であった上に、メールの書き方、レポートの書き方が分からず、毎日が勉強でした。

労働移住ユニットでは、私を含め3人のインターン生が働いており、世界中の名門大学を卒業した人々と働くことで受けられる刺激が私の仕事への向上心を掻き立てました。彼等の効率性、高いコミュニケーション能力、そして人望には毎日刺激され、協力し合いながらも、お互い学び合い、高め合える良きライバルという素晴らしい関係性を築けたことが数多くある内の一つの収穫でした。

業務の多くがレポート作成とはいえ、全ての業務はインターン生同士とのグループワークが重視されました。皆が常にお互いの業務進行状況を把握し合い、協力して助け合うことがユニットの効率性に繋がり、また、それがお互いへの信頼性を高める大変良いシステムを作り上げていました。とは言え、ミーティングやディスカッションなどの場となると、限られた時間内で「いかに相手の意見を尊重し、個人の意見を主張するか」ということがいかに国際機関で働く上で重要かということを知り知る瞬間でした。時には謙遜や遠慮も重要ではありますが、芯となる意見と熱意が無ければ周りの主張に流され、あげくの果てには、存在すら認識してもらえないという厳

国際開発専攻 博士課程前期課程 八重樫 歩

しい結果となってしまふのだと強く実感しました。ミーティングの度に勉強と反省の繰り返しでした。

労働移住ユニットだけでなく、その他のユニットにも世界中から集まった大変優秀なインターン生ばかりでした。遠目から彼等の仕事っぷりを拝見していても、私自身のユニット内での仕事配分を見ても、その人の実力に合った仕事しか与えてもらえないということが現実でした。管理職のような業務をする人もいれば、プロジェクトプロポーザルを作成する人もいます。同じインターン生と言っても、業務内容は多岐に渡ります。従って、より自身の実力を高めるための仕事を獲得するためには、当たり前ではありますが、一つ一つの仕事に手を抜く事なく、責任を持ち、最後までやり通すことが重要だということを知りました。

その一方で、研究を進める上でとても良い仕事環境でした。業務を期日までに終えさえすれば、業務時間内に研究の勉強、更には、他のインターン生を始め、上司にも研究のアドバイスを受けられる素晴らしいユニットでした。また、ユニット内のみならず、世界中のIOMスタッフにも協力の手を差し伸べて頂けるほど、IOMの皆さんは理解のある方々ばかりでした。

半年間のインターンシップを終え、「移住」という新しい分野を一から学べたこと、そして研究に向けて「移住」と「教育」の関係性をより深く勉強できたことで、視野を広げるきっかけとなりました。何より、業務を通して、自分自身を知るきっかけとなりました。皆と協力するためには、私は何を貢献できるのか・すべきなのか、自分の長所と短所としっかりと向き合うことのできた良い機会でした。

限られた時間の大学院生活で国際機関で働けたことは、またとない機会であり、バンコクで経験できたことは、将来の糧となると確信しています。



▲オフィス内でのインターン生集合写真

GSID教員の最新刊紹介

『開発政治学入門：途上国開発戦略におけるガバナンス』

勁草書房（2011年2月刊行）

本書は、木村が主催する科研費「ガバナンス研究」グループの最初の成果報告である。本書の執筆陣は、国際開発研究科で開発政治学（ガバナンス）を担当する木村を中心に、同僚の大坪滋教授（元世銀職員）、西川由紀子准教授に加えて、毎年当研究科で「アジア政治論」を担当している近藤久洋（東京国際大学准教授）、木村ゼミで博士号を取得した佐藤秀雄（元外務省職員。大阪経済大学教授）、小山田英治（元国連開発計画職員。同志社大学大学院准教授）。さらに木村の大学院の後輩にあたる金丸裕志（和洋女子大学准教授）やその同僚の杉浦功一（同。神戸大学国際協力研究科博士）、JICAガバナンス部門職員の小林誉明の9人からなる。いずれも途上国の研究で博士号をもっている。

先の2009年12月に、国際開発研究科では、創立20周年を記念して、大坪滋・木村宏恒・伊東早苗編著『国際開発学入門』（勁草書房）を出版した。同書は翌年の国際開発学会総会で特別賞を受賞した。3人の編著者は、その「国際開発学」の枠内で、開発経済学、

教授 木村 宏恒（共編著）

開発政治学、開発社会学それぞれの本をつくらうと話し合った。その最初の成果が本書である。

2000年に国連のミレニアム開発目標が決議されたとき、ガバナンスこそが開発を進めるすべての基礎にあるという国際的合意ができた。「グッド・ガバナンスは、貧困を撲滅し、開発を促進する上で多分最も重要な要因である（アナン国連事務総長）。」「過去40年のアフリカの歴史に生じたあらゆる困難には通底する1つの事柄がある。それはガバナンスの弱さと効果的な政府の欠如である（アフリカ委員会報告）。」「効果的な国家が開発の中心である（イギリス国際開発省）。」本書の第1の特徴は、そのガバナンスをより広く開発政治学として、その体系化を試みた点にある。第2の特徴は、ガバナンスの最重要課題は経済成長であるとして第1部におき、民主化、ガバナンス支援と並べて3本柱にしたことである。



『コロンビアを知るための60章』

明石書店（2011年6月刊行）

本書は、日本の3倍の国土と4500万人の人口をもつ南米の主要国であるにもかかわらず、これまで日本ではあまり知られることのなかった、あるいは偏った知識しか与えられてこなかった南米のコロンビアという国について、その全体像を紹介しようとするわが国では初めての試みである。執筆陣は、いずれもコロンビアでの長期滞在経験をもつ12人の日本人専門家と二人の若いコロンビア人から成る。構成は、全部で60の章と5つのコラムが9部に分けられている。第1部「自然と資源」では、二つの大海に面し、アンデスの高峰や大河を擁するこの国の豊かな自然と環境、恵まれた天然資源などを概観する。第2部「歴史」では、独自の文明が開化していた先スペイン期から、波乱に満ちた独立期、そして20世紀前半の歴史を振り返る。第3部「政治と外交」では、おもに現代の政治と外交の状況及び諸問題を検討する。第4部「経済」では、経済、金融、そしてエネルギーの

教授 二村 久則（編著）

現況について解説する。第5部「暴力と麻薬」では、現代コロンビアの宿痼ともいえるべき麻薬組織、反政府ゲリラ、右翼準軍事組織などの実態を描く。第6部「人々と社会」では、この国の国民を形作るさまざまな人種、そしてそうした人々の宗教や教育について解説する。第7部「文化と暮らし」では、食文化、酒、美女など、日常生活の彩りを描く。第8部「文学と芸術」は、文学、音楽、美術、演劇など、コロンビアが誇る芸術の分野について叙述する。最後の第9部「都市と観光」では、コロンビアの代表的な都市が持つさまざまな顔、そして祭りなどが紹介されている。本書は、1998年に最初の1冊が刊行されて以来、息の長いシリーズとして明石書店から出版され続けている「エリア・スタディーズ」シリーズのちょうど90冊目になる。



『Bootstrapping information from corpora in a cross-linguistic perspective』

Massimo Moneglia, Alessandro Panunzi (eds)

Firenze University Press 2010. 214p

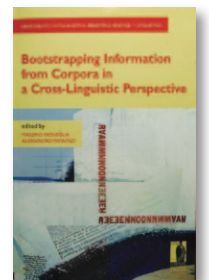
教授 藤村 逸子（共著）

本書は、フィレンツェ大学イタリア語学研究所（LABLITA）の発行による、コーパス言語学の理論的側面に関する学術書である。2008年に開催された第3回 International LABLITA Workshop in Corpus Linguisticsにおける研究の成果が収められている。

LABLITAは、話し言葉コーパスにおいて有名である。C-ORAL ROM Project は、ロマンス語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語）の話し言葉を音声付（プロトタイプ分析付）で公開した大きなプロジェクトである。

本書は、C-ORAL ROMの構築の際にも理論面のアドバイザーであった、Douglas Biberを筆頭に9名の執筆者が共著者に名前を連ねて、コーパス言語学を多方面から理論的に検証している。コーパス言語学は、1990年はじめより情報工学の成果として発展した。

大規模な言語データの処理により、言語の理論的・記述的研究を推進させる有力候補として期待されている。藤村は、日本語の色彩形容詞と色彩名詞を対象に、品詞の意味と単語の統語特性の相互的關係をコーパスに基づいて記述し、このような精密な言語記述は、内省などの従来の方法のみでは行い得ないことを示した。Biberは話し言葉と書き言葉の差異に関して、書き言葉にはジャンルによる大きな差異があるのに対して、話し言葉はジャンルを問わず均一であることを述べ、その理由として、どんな話し言葉も、現場において一回限りのものとして発話されるからであろうとした。



客員研究員の紹介

国内客員研究員

藤原洋二郎((株)パデコ・シニア コンサルタント)

研究課題: バングラデシュにおける地方行政の強化と方向性
期 間: 平成23年4月～平成23年9月

白井 正敏(中京大学経済学部・教授)

研究課題: 地方消費税の創設について
期 間: 平成23年4月～平成23年9月

Jose ELVINIA ホセ エルビーニア

(南山大学大学院国際地域文化研究科・GP嘱託講師)

研究課題: Land Reform in the Philippines フィリピンにおける農地改革
期 間: 平成23年4月～平成23年9月

倉沢 愛子(慶應義塾大学経済学部・教授)

研究課題: インドネシア社会の開発と社会変容
期 間: 平成23年5月～平成23年7月

外国人客員研究員

Swapan Kumar Dasgupta(バングラデシュ農村開発研究所・部長代理)

研究課題: バングラデシュの沿岸地域における住民の気候変動に関する認識と対処能力
期 間: 平成23年5月1日～平成23年7月31日

Dawit Alem Bimerew(エチオピア農業研究機構・研究普及農民連携部農業経済課長)

研究課題: エチオピアにおける種子問題の短期及び長期的戦略
期 間: 平成23年8月1日～平成23年8月31日

John Weidman(ピッツバーグ大学教育学部・教授)

研究課題: 比較教育学の理論と実践－米国と日本の研究動向の相違と類似点
期 間: 平成23年10月1日～平成23年12月16日

Enstella Bhalalusesa(ダルエスサラーム大学教育学部長・准教授)

研究課題: タンザニアにおける成人識字教育と女性の教育参加
期 間: 平成24年1月1日～平成24年3月31日

Riza Noer Arfani(ガジャマダ大学国際関係学部・講師)

研究課題: キャパシティ・ビルディングにおける学際的な研究及びWTOに関する研究の構築
期 間: 平成23年5月23日～平成23年9月16日

Ake Tangsupvattana(チュラロンコン大学政治学部・助教授)

研究課題: タイにおける欧米および東アジア企業の社会的責任(CSR)
期 間: 平成23年9月21日～平成23年10月31日

Karma N. Ura(ブータン研究所・所長)

研究課題: GNHの立証と政策的含意
期 間: 平成24年1月4日～平成24年3月31日

浅田 正彦(京都大学大学院法学研究科・教授)

研究課題: 国連による経済制裁の理論と実践
期 間: 平成23年7月～平成23年9月

西寺 雅也(山梨学院大学法学部・教授)

研究課題: 市民自治・地域再生の現状について
期 間: 平成23年10月～平成23年12月

中村真規子(太成学院大学人間学部・准教授)

研究課題: 発展途上国の医療
期 間: 平成23年10月～平成23年12月

大曾美恵子(名古屋大学名誉教授)

研究課題: 日本語教育における文法の研究
期 間: 平成23年4月～平成23年6月

恒川 元行(九州大学言語文化研究院・教授)

研究課題: 「～を始める」の意のbeginnenの競合用法と文脈の予想
期 間: 平成23年7月～平成23年9月



Irène Tamba(社会科学高等研究院(フランス)・教授)

研究課題: 日本語の形容詞と文法カテゴリー
期 間: 平成23年4月4日～平成23年5月30日

森 美子(ジョージタウン大学・准教授)

研究課題: 第二言語としての日本語習得研究
期 間: 平成23年6月7日～平成23年7月28日

山中 信之(エアランゲン大学(ドイツ)・講師)

研究課題: 日本語ドイツ語タンデム教育の研究
期 間: 平成23年8月1日～平成23年9月30日

樊 秀麗(首都師範大学教育学院(中国)・教授)

研究課題: 教育民族誌の方法論的研究
期 間: 平成23年10月1日～平成23年11月30日

林 明鮮(山東工商学院政法学院(中国)・教授)

研究課題: 日本・中国・韓国における家族の変容と社会的ネットワークの研究
期 間: 平成24年1月5日～平成24年3月31日

スタッフの人事異動

協力教員の交代 国際文化協力講座

旧: 塩村 耕 教授 (大学院文学研究科)
新: 大石 和欣 准教授 (同上)

Inormation
お知らせ

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

オープンキャンパス 2011 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2011」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

日時 平成23年7月16日(土) **会場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)

地図はホームページを参照ください。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内容 プログラム

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| (1) 留学生相談 10:00～12:00 | (5) 全体説明会 14:00～14:50 |
| (2) 社会人志願者説明会 16:30～18:00 | ●専攻及び教育プログラムの特徴 ●GSIDの入学生の構成、就職先 |
| (3) 施設見学 | ●入学試験の説明 ●公開講座の案内 など |
| ●図書室 11:00～13:00 | (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:30 |
| ●言語情報処理室(コンピュータールーム) 13:00～14:00 | ●各専攻別説明会(教育プログラムを中心に) |
| (4) 院生によるGSID紹介 13:15～13:45 | ●個別相談(教員と院生が対応) |
| 海外実地研修・国内実地研修画像放映、院生による | (7) 展示 11:00～16:30 |
| 特色ある社会貢献活動を含む | 海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など |

お問い合わせ先 / opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp